

2-2 地域づくりの現状と課題

2-2-1 東部地区住民の地域づくりに対する活動の変化

東部地区の地域づくりの歴史や現況から見ると、当地区が農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞した頃までは、地域全体の活性化に対する推進力も団結力も強く、活発な活動が見られた。しかし、ダム建設に伴う集落移転や急激な人口減少・少子高齢化の進行により、個々のムラ機能を維持していくことが難しくなっている。このため東部地区を一つの生活エリアとして充実させていくために取り組んできたこれまでの住民活動も脆弱化してきている。

2-2-2 ダムと周辺環境を活かした東部地区の地域づくりの課題と可能性

新たな環境での再出発が期待される東部地区の地域づくりについて、その現況特性を整理しながら、今後の課題と可能性を表 2-3 に探ってみた。

表 2-3 地域づくりの課題と可能性

要素	ダムと周辺環境を活かした将来の可能性	地域づくりの課題
自然・景観の保全と活用	<ul style="list-style-type: none"> ▷劇的に移り変わる季節感を体験できる景観ポイントやルートなど、地域の誇りとすべき場所を決めて、住民がその景観保全のために協力し合うことが、地域づくりの具体的な活動につながっていく。 ▷霧・湖水・雪といった豊かな水の資源性を活かす多様な切り口を用意することによって、訪れた人たちに癒しと感動を与えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶自然が豊かで、美しい自然景観があるという財産を、まちづくりに活かすためには、そこに住む人たちと自然との良好な共生関係が見えることが、これからの時代には必要となる。 ▶例えば、里山やスギ人工林の管理と有効な利活用がきちんと行なわれているとか、自然景観を一層引き立てる人工景観への配慮がなされているとかの住民側の活動が重要になってくる。
歴史・民俗の伝承と活用	<ul style="list-style-type: none"> ▷縄文時代からの森との共生の歴史や知恵を、生きた情報として伝承しながら、地域固有の文化として、来訪者にも感動を与え、観光交流や体験学習に役立てていくことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶現代に生きる我々も未来へ、この大地の記憶を伝えていかなければならない。 観光交流に活かすことは、伝承していくための手法の一つではあるが、真の目的は未来の地域づくりへの人材育成であり、地域を担う若者の定住が課題となる。
交流人口の拡大や地域連携の推進	<ul style="list-style-type: none"> ▷ダム湖周辺地区を魅力アップすることによって、町内における拠点性が高まる。 特に町内の他の地区には無かった広々とした水辺環境は新しい資源として効果的な利用を図ることが可能である。 ▷町外との交流・連携においても、白川ダムや大石ダム、奥三面ダムなどとの連携、民話の里としての交流、歴史的街道の交流などに広げていくことが可能である。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶町内外を問わず、新しい環境が生れることによって、訪れる人が増えることは予測できるが、これらの人たちがリピーターとなって、地域の人たちと交流が継続されるためには、新しい「しくみ」や「しかけ」をつくって行かなければならない。 ▶広域な連携交流を図るためには、多様な関係機関との調整や協働が必要となる。
学習環境の創造	<ul style="list-style-type: none"> ▷ダム上流地域の歴史文化や農山村環境に加えて、新たな湖水面や、湖畔の水辺環境を学習環境の拠点として活用することが可能である。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶この地域に暮らす人たちが育んできた、自然との共生の知恵を伝承していく人材の育成が不可欠となる。
癒しの場の創出	<ul style="list-style-type: none"> ▷背景の山々や森林・溪谷などの豊かな自然、美しい農村景観、広々とした湖、多様な水辺空間を、健康回復や癒しの場として活用することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶専門の医師やセラピスト、インストラクターとの連携体制を構築するなど、単なる癒し空間の提供に留まらない、受け入れのための体制づくりが求められる。

<p>農林産物と郷土食の活用</p>	<p>▷わらびやきのこ、五穀など地域の特産物を活かした、安心安全な素材や加工品、郷土食の提供などによる事業化の可能性は高い。</p> <p>▷水質日本一とともに、おいしさ日本一のブランド米を目指すことが可能。</p> <p>▷スローフード、無農薬野菜、自然食、安心安全な食、食育など、食に関するキーワードが多く見られる時代にあって、当地域の昔からの郷土料理は、まさにこれらに当てはまる自然素材を活かしたものばかりで時代的なニーズに合っている。</p> <p>▷町が進める森林セラピー基地なども連携して、自然の持つ癒しを、空間だけでなく食の面からも満たすことができるという商品化が可能である。</p> <p>▷グリーンツーリズムを推進する大きな要素となる。</p>	<p>▶地域が一体となって推進する必要がある、共通認識に立った活動と協働が必要となる。(個人的レベルの取り組みから、いかに地域全体の活動に広げていくかが課題となる。)</p> <p>▶現在、地域内で取り組んでいる様々な情報を広く発信していく体制づくりが必要である。</p> <p>▶農業や食に関しては、町外からの移住者とのかかわりも重要となり、まちづくりの視点からの協働が課題となる。</p> <p>▶魅力アップのためには食だけでなく、ものづくり体験、湖面や水辺での活動、歴史街道の散策、縄文遺跡を始めとする地域の歴史・文化資源の探索など、他の要素との連携が課題となる。</p>
<p>若い人たちのU・J・Iターン促進</p>	<p>▷東部地区では、基督教独立学園高等学校の受け入れに始まり、今でも町外からの転入者を多く受け入れている。この特性を今後も積極的にまちづくりに活かし、自然との共生を望む若い人たちを受け入れつつ、活性化を図ることが可能な地域である。</p>	<p>▶転入者を受け入れるだけでなく、彼らのエネルギーを地域づくりに有効に活かしていく積極的な連携方策が課題となる。</p> <p>▶地縁を大切にする集落活動に彼らを積極的に参加させることが必要である。</p>
<p>ものづくりを大切にしたい仕事場の創出</p>	<p>▷かつて盛んだった木地づくりや、つる細工、山菜・きのこを活かした食などの伝統技術の伝承を、さらに一歩進めた新しいものづくりへと進化させ、地域産業起こしへと高めていける素材を有している。</p>	<p>▶既にこの地区では絶えてしまった技術もあり、地域内だけでは困難な場合もある。</p> <p>▶地域間の連携協力や、多様な地域づくりの活動との連携によって、新たな方策を模索していく必要がある。</p>
<p>民話の活用</p>	<p>▷この地区を代表する特徴の一つに民話や伝説の多さがある。周辺集落の雰囲気と一体となった民話の里としてのポテンシャルは高い。</p>	<p>▶現在、語り部として来訪者に語ることでのお年寄りがいなくなり、民俗文化の継承が懸念される。</p> <p>▶語り継ぐことのできる後継者の育成が急務となる。</p>
<p>雪の有効活用</p>	<p>▷雪を利用した雪中貯蔵によって、おいしい野菜や米を提供することが可能であるだけでなく、自然エネルギーとして公共施設や集落施設等の地域冷房にも活用が可能で、雪国らしいまちづくりができる有効な資源である。</p>	<p>▶実用化までには、雪中貯蔵によって味がよくなる客観的なデータの収集など、調査研究が必要で、関係機関との連携が不可欠である。</p> <p>▶雪エネルギー利用は各地でも行われており地域的特長が求められる。</p>
<p>木質バイオマス利用による森林と林業の活性化</p>	<p>▷森林への適正な管理が行われなくなり、森林の荒廃と林業の衰退が問題となっている。人工林の未利用間伐材や里山の落葉紅葉樹の定期的伐採による木質資源を、バイオマスエネルギーとして活用することによって、地域森林の管理と、CO2削減による地球温暖化防止に寄与できる。</p> <p>▷また、森林面積の多い当地域にとって林業関連産業の持続的経営に新たなインパクトとなる。</p>	<p>▶林業労働者の高齢化が進み、後継者がいなくなってきた。大石沢に転入して林業に従事している若いIターン者のように、町外からの活力の導入は不可欠となりつつある。</p> <p>▶こういう若者たちが定住できる環境づくりが、今後の可能性の拡大に必要なってきている。</p> <p>▶源流部の森林の維持保全は、その地域だけの問題ではなく、流域全体、日本全体の大きな問題であり、多くの人たちにいかに目を向けてもらうかが課題である。</p>